徳島新聞　令和２年６月５日（金）

アルツハイマー病治療薬

新薬治験 きょう開始

iPS研究基に 京大・徳大など７病院

京都大は4日、特定の遺伝子変異がある家族性アルツハイマー病の進行を遅らせる治療薬候補の医師主導治験を5日に始めると発表した。徳島大学病院など7病院で実施する。候補薬はパーキンソン病の薬「ブロモクリプチン」で、アルツハイマー病患者の人工多能性幹細胞（iPS細胞）からつくった神経に計1258種類の既存薬を与える実験で効果が見込めることを突き止めていた。

iPS細胞を使った研究を基にした治験で、アルツハイマー病が対象になるのは初めて。

治験の対象は「プレセニリン1」という遺伝子に変異のある軽度から中程度の患者10人。2グループに分かれ、それまでの治療は続けながら、ブロモクリプチンと薬効のない錠剤をそれぞれ飲んでもらい、認知機能や健康状態に違いが出るかどうか調べる。

京大の井上治久教授らは2017年、患者のiPS細胞からつくった神経細胞にこの薬を与えると、アルツハイマー病の原因タンパク質「アミロイドベータ」の生成が半減することを発見。これが治験につながった。

徳島大学病院では1人以上を対象に治験を実施する予定で、現在、対象者を募っている。問い合わせは脳神経内科〈電088（631）3111〉。